

2007
May

Lecture

59

Subject 科学コミュニケーションとは

丸の内キャリア塾とは、毎月第3火曜日に掲載しているキャリアデザインを考える女性のための実践的学習講座です。毎回1つのテーマを掲げ、キャリアアップに必要な実用事例を多面的に特集しています。今回のテーマは「科学コミュニケーションとは」。科学リテラシーを向上させ、自分なりの立場や意見を表明するための方法を探ります。

キャリアアップインタビュー

話の導入部分を工夫すれば、より多くの人に理解してもらえる

科学の知識は判断力を養い、文化をより豊かなものにしてくれる。研究者は科学が持つそんな力をどのように社会に伝えていくのか。科学の負の面についてもしっかりと目を向け、その

うえで科学を魅力的に伝える、理系研究者のための科学「コミュニケーション」を担当する東京大理学部の横山広美さんに、科学の奥深さや独自の「コミュニケーション法」についてうかがった。



科学の魅力や奥深さを世の中に伝えていくために

この四月に、サイエンスライターから現在のお仕事に転身されました。まず、これまでのキャリアについて聞かせてください。

横山 「科学を伝えたい」と考えるようになったのは、中学二年生のころ。当時ミッションスクールに通っていた私はお祈りをしながら、神様はどうやってこの世界を作ったのか、というも考えていました。そんなとき、「ニュートン」という科学雑誌を偶然手に取り、その答えが科学によって得られることを知ったのです。宇宙の成り立ちは物理学という学問によって説明できると知り、強い衝撃を受けたことを今でも鮮明に覚えています。科学を知って世界観がその前とはまったく変わったのです。その年に七十冊ほど科学の本を読み、内容をノートにまとめていました。それは私にとっても楽しい体験でした。それ以降、科学を人に伝える

ことが私のテーマになりました。算数や理科が苦手だったにも関わらず理系の大学に進学したのも、科学に携わる仕事のために現場の研究を知る必要があったからです。大学院時代、知人から科学雑誌の編集部員を紹介してもらったことがきっかけでサイエンスライターの仕事を始め、研究生活をしながら記事を書く生活をしはらう続けました。博士号取得後は、サイエンスライターの仕事を広げると同時に、総合研究大学院大学で、科学「コミュニケーション」の研究をしました。

横山 基本的に基礎科学の魅力を伝える、必要性を訴える仕事です。大きく二つに分かれます。ひとつは、プレスリリースの発行や公開講演会の運営といった、広報室としての仕事。私が自ら「コミュニケーション」として情報を世の中に伝えていく仕事です。一般的な業務にせずクリエイティブな仕事をしたいと思っています。

横山さん自身は、科学の奥深さを伝えるために、どのような努力や工夫をしていますか？

横山 「二つめは、大学の理系研究者が「コミュニケーションスキルを高める研究・教育です」。研究者は研究に没頭していればよいという風潮がこれまでありましたが、これからは一人ひとりの研究者自らが科学の魅力や役割を社会に伝えていかなければならないと考えています。そのためには、科学に対する社会の「T-Z」を知り、その二

横山 私自身新しい取材などをするとその奥深さや美しさに感銘を受けることが多いです。自然には自然のもつ物語がある。その物語を研究者という人を通じて伝えていきたいという気持ちが強くなります。誰もやったことのない方法で、科学を伝えるクリエイターでありたいと思います。

同時に、社会と科学の間の問題に取り組み、より幸せな社会を目指したいと思っています。私の夢は、そういった科学の力や役割を、もっともつと多くの人に伝えていくことです。

横山 最近、科学に関する誤った情報が注目されています。「マイナスイオンで誰でも健康になれるや」「納豆を食べればやせられる」など。科学とは、ある事実が成り立つための根拠やプロセスを論理的に明らかにするものなので、科学の知識をある程度身につければ、「納豆を食べればやせられる」という情報が誤りであることを、自分自身で判断できるようになるはず。何が正しくて、何が誤りであるかを判断できるようにしなければ、それだけ自分の世界や価値観が広がり、人生が豊かになると思うのです。

横山 「納豆を食べればやせられる」という情報は、人がいないと生まれません。人がいてこそ科学です。そして科学には夢があり、奥深いもので、知ると感動します。それを人に伝えるためには研究者が何を考えているかを汲み取らなければなりません。一人でできる仕事は何もありません。これからは感動し続けながら、仕事を続けていきたい。そして高校生など若い人々にもこの感動を伝え、一人でも多くの人に、科学に興味を持っていたらいいと思います。

横山 「納豆を食べればやせられる」という情報は、人がいないと生まれません。人がいてこそ科学です。そして科学には夢があり、奥深いもので、知ると感動します。それを人に伝えるためには研究者が何を考えているかを汲み取らなければなりません。一人でできる仕事は何もありません。これからは感動し続けながら、仕事を続けていきたい。そして高校生など若い人々にもこの感動を伝え、一人でも多くの人に、科学に興味を持っていたらいいと思います。

丸の内キャリア塾

Marunouchi Career Academy



横山広美さん
東京大学大学院理学系研究科・理学部
広報室 科学コミュニケーション担当 准教授

一九七五年、東京生まれ。東京理科大学大学院在学中にサイエンスライターの活動を開始する。理学博士号を取得後、総合研究大学院大学上級研究員などを経て、二〇〇七年四月より現職。横山さんがプロフェッショナルとする、第二回女子高生のための「サイエンスカフェ 本郷」は、「光を読み解く」金星からのメッセージを掲げる赤外線」をテーマに六月十七日(日)開催予定。

横山 「二つめは、大学の理系研究者が「コミュニケーションスキルを高める研究・教育です」。研究者は研究に没頭していればよいという風潮がこれまでありましたが、これからは一人ひとりの研究者自らが科学の魅力や役割を社会に伝えていかなければならないと考えています。そのためには、科学に対する社会の「T-Z」を知り、その二

横山 「納豆を食べればやせられる」という情報は、人がいないと生まれません。人がいてこそ科学です。そして科学には夢があり、奥深いもので、知ると感動します。それを人に伝えるためには研究者が何を考えているかを汲み取らなければなりません。一人でできる仕事は何もありません。これからは感動し続けながら、仕事を続けていきたい。そして高校生など若い人々にもこの感動を伝え、一人でも多くの人に、科学に興味を持っていたらいいと思います。

最後に、「ご自身の夢をお聞かせください。」